

職人と学生の交流で探る

「伝統工芸のこれから」

鼎談

会田源司 「有限会社ツルヤ商店」

吉田長芳 「有限会社よしだ」

長谷川光昭 「長文堂」

芸工大では2017年より、山形市の呼びかけで

山形市伝統的工芸品振興会の職人さんたちと交流事業を行っています。

生活様式の変化のために若手職人が育ちにくい昨今の状況を、

新しいデザインの提案で打開するのが目的です。

今回は、より中身の濃い事業として進めていくため、

この事業のキーマンで後援会会員の職人お二人に、

家業の鑄物工房を継承した卒業生の伝統工芸士を交え、

雲の切れ目を探ってみました。

聞き手…遠藤牧人（地域連携推進課）



分野も世代も異なる 3人の職人の方々と

——本日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。伝統工芸は生活様式の変化とともに次の一手を考える時期になっています。今日は知恵を出し合って、業界の明るい未来を探ってみましょう。まず、お三方の自己紹介をお願いします。

会田：後援会会員、ツルヤ商店の会田です。山形市伝統的工芸品振興会の会長を務めております。社員は6名、次世代に簾工芸の魅力を伝えていく使命があると考えています。ツルヤ商店は明治40（1907）年創業の簾製品工房です。地元山間部で取れるつる細工で創業しましたが、大正末期から輸入材を使うようになりました。夏をイメージさせる商品なので東北地方は消費地ではなく、商売は関東・関西が中心です。輸入材を使っているため安価な外国産との差別化が難しく、デザイン性を高めてきました。類似

品があっても、山形で作ったうちの製品を売りたい、と選んでくれるファンを獲得していきたいです。東北唯一の工房です。

吉田：後援会会員、桐箱を作っている吉田（有限会社よしだ）です。現在社員は3名、後進を育成中です。1930年創業、今年で90年です。山形は桐の産地で、昔から米織や鑄物など、贈答品の箱としての需要がありました。祖父は木地師でお膳を作っていました。お膳からちゃぶ台へと生活様式が変化したところ、技術を活かして桐箱製作を始めました。当時は良かったのですが、現在、桐箱屋は市内で2〜3軒、用途は主に高級さくらんぼ用です。

長谷川：長文堂の長谷川です。1998年、芸工大デザイン工学部情報デザイン学科情報計画コース（当時）の卒業です。現在社員は3名、私が後継者です。山形は地元でも材料が調達でき、鑄物屋としての創業は1952年、祖父の代です。祖父はすぐに亡くなり、後を継いだ父が、祖父と自分の名前から一字ずつとって「長

文堂」と名づけました。基本的に鉄瓶だけを作る鑄物屋は山形県内でうちだけです。『新しいものを作るときは鉄瓶を基本にしなさい』という祖父の言葉を守っています。10年ほど前に株式会社コロンの萩原尚季さん（2001年、本学大学院デザイン工学研究科修了）のデザインで作ったクジラの箸置きも鉄瓶を基本とした上で制作しました。



会田源司 あいたげんじ
（右）ツルヤ商店代表取締役。簾工芸職人。芸工大との関りは20年を超える（j）



吉田長芳 よしだながよし
（右）よしだ代表取締役。桐箱職人。本学で美術科工芸コースの授業も担当する（j）



長谷川光昭 はせがわみつあき
（右）長文堂3代目。芸工大情報デザイン学科を卒業して家業を継いだ異色の伝統工芸士（j）



上：（株）コロンの萩原尚季さん（本学卒業生）が、長文堂の鉄瓶の歴史を学んでデザインしたクジラの箸置き／右：長文堂の看板商品の鉄瓶「夏目」。長文堂は創業者の教えを忠実に守る工房で、基本的に鉄瓶だけを作り続ける。当時のデザインを踏襲した鉄瓶は、現代の生活様式をも抱擁する確固たる存在感を放っている（j）



3年間の交流事業を振り返って 見えてきたこと

——ありがとうございます。三者、事情はだいぶ異なるようです。さて、本学プロジェクトデザイン学科が関わってきた「職人と学生の交流事業」が今年で4年目を迎えます。成果品を山形市伝統的工芸品まつりに出展した過去3年間を、まず、会田会長、振り返っていただけますか。

会田：職人と学生の交流事業は山形市山形ブランド推進課が中心となり、市の事業として市内の伝統工芸産業の技術継承と後継者確保を目的に始まりました。市では芸工大の卒業生がすぐに職人になってくれたら、と考えたようですが、学生さんは魅力ある商品がなければこの業界を目指してはくれません。当時の担当「三橋幸次教授にそのことを指摘していただき、「若い世代はどういう商品なら買いたいか」を、学生を交えて考え、職人はそのアイデアをもとに試作しました。職人が形にしなれば、学生たちはついてきてくれません。長谷川さんの鉄瓶のように現代でもそのまま使えて魅力を感じてもらえるものは、見せ方を工夫することも考えました。でも、それは例外です。生活様式の変化で仕事がなくなり、職人を雇用できなくなるという大きな流れは、なかなか止められません。

3年目となった昨年は、藤田寿人教授に担当が代わりましたが、その路線は変わっていません。

ん。今後も期待が高まります。

——ありがとうございます。では、吉田さん、感じたことをお願いします。

吉田：職人はものづくりに長けているかもしれないですが、伝え方が足りないです。デザインも課題です。自分では思いもつかないデザインが学生との交流で生まれて楽しいです。もっと学生と接する機会を増やしたいです。あと、終わった後の展望も。：。昨年は日程上できませんでしたが、ポストイットを使ったアイデア出しなど、もっとやりたいですね。昨年は全体で集まったのは1〜2回で、あとは学生さんたちに各工房を回ってもらいました。

——ありがとうございます。ところで、振興会はどのくらいの規模で、うち何社がこの事業に参加なさったのでしょうか。

会田：約20業種あります。この3年間に、学生の方々にはすべての業種の仕事に触れていただき、さまざまなアイデアを提案していただきました。試作という点では、吉田さん（桐箱）と私（籐製品）と漆器、木工、刺し子ですかね。和傘は日本画の学生による絵付け、鋳物は型を起さなければならず、簡単に試作できません。その他、のこぎり、包丁などは試作まで行かなかったけれど、デザインのアイデアはいろいろ出しました。

学生からさらっとアイデアを出されても、『これをどうしても試作してほしい』という熱意

が感じられないと、職人は動かないものです。でも、学生が熱意を伝えるのは難しかったかもしれませんね。ただ、さらっと、の方がいいアイデアが出るようにも思うので、職人の考え方が前向きになれば。長文堂さんみたいに、古いものを活かしつつ若い人の前向きな考え方がほしいです。

長谷川：うちの鉄瓶はラッキーで、生活様式が変わっても、それに乗っていけています。IH調理にも対応しています。この事業に参加していないのは、参加しても基本的に新しいものは

作らないし、出てくるのは申し訳ないですけど学生さんのアイデア。もともと、熱意が伝わってくれば違いますが。

——長谷川さん、商品企画や情報発信の専門家として、うちの卒業生だから言える、厳しくも温かいご意見をありがとうございます！

芸工大との関りで、 こんな成果が得られました

——ここで、3年間の事業、および芸工大関係

の成果品を紹介してください。

吉田：このスマホスピーカーは最初の年に三橋教授を中心に提案いただきました。箱ばかり作っていましたが、こういうものを一つ作ることで、次の可能性が発掘できたかな、と思いましたが、音楽を聴いたときの音の広がりが素晴らしいです。うちのオンラインショップとインターネットで販売しています。

会田：吉田さん、そのあと、最近もつとクロロゾアアップされている商品がありますよね。

吉田：（控えめに）はい。いづれも女性向け商品なんですけど、高級パンを保存する桐箱、そして、寺社仏閣めぐりをするときに使う「朱印帳ケース」がよく売れています。

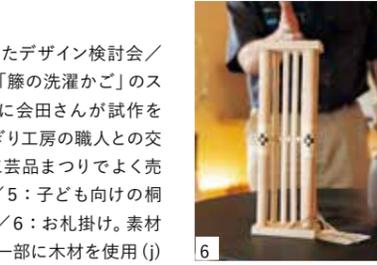
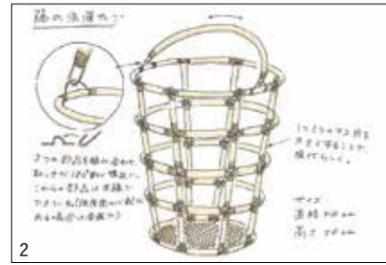
——これは交流事業のあと、ご自身で考案された本当の成果。次の可能性が発掘できてます！続いて会田さんはいかがでしょう。

会田：事業の成果品としては、このお札掛けでしょうかね。三橋先生が中心となって考案してくれ、つる以外に（吉田さんと相談して）板を使うなど、材料はうちで考えました。イベントなどで売っていますが、これをどう流通させるかですね。昨年、藤田先生中心に考えていただいたタオル掛けも、短期間の開発でしたが、山形市伝統的工芸品まつりでよく売れました。

その他、芸工大関係で言えば、卒業生で取締役の羽田（羽田康志さん 2011年、プロジェクトデザイン学科卒）がデザインした3種類のハ



上：「桐箱スマホスピーカー-KIRINONE」。桐製ならではの音色がいい。次の可能性が発掘できた一品／中：以下、吉田さん独自の発案。「朱印帳ケース」は寺社仏閣巡りをする若い女性に大人気／下：「吉田パン蔵」。パン好きの人のために吉田さんが考案した桐箱ケース。パンの湿度を保ってくれる



1：大学で行われたデザイン検討会／2：学生が描いた「籐の洗濯かご」のスケッチ。これを基に会田さんが試作を行った／3：のこぎり工房の職人との交流／4：伝統的工芸品まつりでよく売れたタオル掛け／5：子ども向けの桐箱ワークショップ／6：お札掛け。素材を吟味した結果、一部に木材を使用(j)

ンガー(3500円)がよく売れます。発売後5
6年、弊社の商品としては価格帯が低いので、
他の商品に目を向けてもらうきっかけの商品と
なっています。

また、卒業生の小野里奈さん(2001年、
大学院デザイン工学研究科修士) デザインで、
発売後3年の脱衣かごもよく売れます。足つき
の二段ものは2万円ほどと高価ですが、ぎりぎ
りまで細い素材を使用した軽快なデザインが評
価されています。また、脱衣かごとしては小さ
めで、小物入れとしての需要もあります。

伝統工芸には絶対残していかなければならな
いものもありますが、うちの商品の場合は、技
術を残しながらも変化に対応していかなければ
生き残れないと思っています。デザインを学ん
でいる若い人の感覚を、私たちがどう受け止め
すくい上げるかが大切だと思います。

商品開発だけではない！ 後継者発掘にはいろんな機会が

さて、市の事業の最終目的は、後継者を確
保することです。しかし、芸工大には職人にな
ることを目標に入学者人はほとんどいません。
長谷川さんはいかがでしたか？

長谷川…私は情報発信の勉強をするために芸工
大に入りました。入学時は家業を継ぐ気はあり
ませんでした。情報計画コースには「山形宝探

伝統工芸の後継者育成 雲の切れ目に明るい兆しも

最後に、経済的にひっ迫した現代において、
後継者をどう育成したらいいでしょう。

会田…終身雇用制が崩れた10年くらい前から、
ものづくりに興味を持つ若者は間違いなく増え
ました。私はプロダクトデザインで魅力をアッ
プして、つる細工製造を続けていこうとしてい
ますが、現代の生活習慣を考えると、斜陽産業
であることは否定できません。このところ入社
希望者が数人来ていますが、先を考えると安易
に社員採用はできません。

県内で新しいおしゃれなお店が開店する度
に調べてみると、多くの場合、芸工大の卒業生
が関わっていて、中にはフリーの職人やデザイ
ナーがチームで仕事に取り組んでいたりします。
若い世代は意外とたくましく生きています。

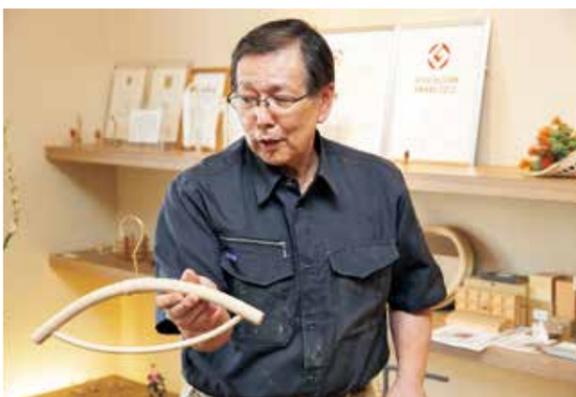
長谷川…そういえば、私の学生時代には情報計
画コースに起業をサポートしてくれる河北研究
室がありましたね。

一度も就職せずに起業して活躍する卒業生
が、山形にもいます。この時代、社員としての
採用以外に、行政が創業期に使いやすい支援策
をいろいろ用意することが、必要でしょう。

会田…高度成長期には独立してすぐに成果が出
たけれど、今はなかなか先が見えないような気
もします。でも、ネットでつながれる若者には



二人の先輩の前で、学生時代から現在に至る思いを語る長谷川さん。
こういう語らいの場が、山形の伝統工芸界と芸工大との絆をさらに太くしていく (j)



本学卒業生 羽田康志さんデザインの藤のハンガー。この「eye」のほか「T」、
「shoulder」の3種類。比較的低価格で入り口商品としても機能する (j)



定番商品となった脱衣かご「ハイル」。本学卒業生 小野里奈さんのデザイン。
小ぶりで小物入れとしての需要もある。脚のついた二段タイプも人気 (j)

し」という活動があり、おかげで家業の鋳物屋
を宝と捉えることができました。卒業研究では
家業の情報発信を研究しました。その過程で、
鋳物の技は自分が継がないと途絶えてしまう。
それはイヤだ！となり、修業の後、家業を継ぎ
伝統工芸士となりました。

ですから、私は作るだけでなくそれを残す提
案を大事にします。商品売って使ってもら
ために、どうしたらいいかを考えています。
自分で作りたい人だったら、こういう考えには
至らなかつたと思います。私は職人の技を活
かしてくれるデザイナーと仕事がしたいです。
会田…家業を継ぐことについてお父さんは？
長谷川…喜びましたが、将来のことを思えば心
中は複雑だったのではないかと思います。

吉田…市の交流事業以外に、芸工大芸工芸コース
3年生の漆工芸の授業を、2年前から持ってい
ます。「この子には来て欲しいな」と思ったりす
ることがありますね。

長谷川…じつは、私は企画構想学科での講演を
きっかけに、リクルートに成功しました！その
学生のおじいさんが建具職人で、彼女は私の仕
事に興味を持ってくれたのです。こういう学生
はどこもこの学科にいるかわかりません。大切な
は興味、学科を限定せずに参加できる事業にで
きるといいかもしれませんね。

後継者発掘には商品開発以外の方法も考え
る価値がありそうですね。

チャンスがあると思います。

吉田…商品力のある鋳物は伝統工芸の最上位。
鋳物の人たちが業界を引っ張ってほしい。学生
さんたちを見てみると、桐箱もまだまだいろい
ろできそうな気がしてきました。

会田…この3年間、「大学と地域との繋がりを深
める事業」、「伝統的工芸品の振興」としては、
大きな成果が上がったと感じています。今後も
「時代に即した仕事の継承」を第一に考えていき
ます。

山形県には秀逸な伝統工芸の技を持つ職人
さんが多数いらつしゃいます。芸工大は地域に
根ざした芸術とデザインの大学として、その技
を活かし輝かせるために、そして、時に技その
ものを継承・発展させるために、力を尽くして
いきたいと思っています。本日はありがとうございます。

●問い合わせ先

有限会社ツルヤ商店 <http://www.tsuruya-net.com>
有限会社よしだ <http://hakoyoshi.jp>
長文堂 <http://www.chobundo.jp>

編集部では、後援会会員企業と卒業生・在学生の協働した
事例を積極的に紹介してまいります。会員の皆様からの情
報を心よりお待ちしております。

連載 山形の元氣！卒業生の仕事③ 一 渡邊吉太さん「株式会社アトリエセツナ代表取締役 デザイナー」

一つ一つの積み重ねが未来をつくる



「地に足の着いたイメージ」を目指したというリビングにて。渡邊さんは、この「土間のある家」のカタログでモデルも務めている (j)

(株)アトリエセツナ代表取締役
渡邊吉太(わたなべ・よし太)さんは、
芸工大で金工を、留学先のスウェーデンで
家具デザインを学びました。
近年、グッドデザイン賞を3度受賞、
昨年は加えて山形エクセレントデザインで
グランプリにも輝きました。
本学後援会会員企業との関係も深い
彼の仕事をご紹介します。

取材・編集：遠藤牧人(地域連携推進課)

はじめの一步は高校時代の建築
芸工大では…

渡邊吉太さんは宮城県の出身です。高校時代に建築を学んでから2000年に芸工大に入学しました。「モノづくりを勉強したいと思って、高校では漠然と建築という大きな箱を…。昔の建築家はやれることを全部やったわけです。空間デザイン、家具デザイン、まちづくりまで。自分の領域を決めない姿に憧れています。」

でも、芸工大受験のときは…
「高校で、建築は一人では完結できない世界だと思いました。大学では自分の体で抱えられるサイズのモノを作ろう、自分がすべてコントロールできることをやりたいと。そこで、芸工大の美術科工芸コースに入学し、金工を学びました。」
渡邊さんの手がけた製品はどれも質

感がすばらしい。特に、金属は触らなくても肌触りを感じてしまいます。こうして「抱えられるサイズのモノ」を手づくりした渡邊さんでしたが、それだけでは満足しませんでした。
家具のデザインを学びにスウェーデンへ留学

渡邊さんが入学した頃、芸工大ではスウェーデン国立芸術デザイン工学大/KONSTFACKとの交換留学が盛んでした。デザイン工学部を中心としたプロジェクトでしたが、渡邊さんは2004年2月～6月、4年生のとき、美術科から参加しました。
「二人で完結せず、人と関わっていかないと食べていけない、と気づいたのです。だから1、2年生の頃からデザインという目線でモノを作っていましたね。グラフィックデザインコース(当時)の親友とデザインマインドを共有

させてもらって独学しました。」

「今も、自分の開ったお店のロゴなどは、世界感を統一するため、自分で作っています。ただし、『何でも屋』ではないので、グラフィックだけの仕事は請けません。」

さて、家具デザインを学びに留学した渡邊さん、まず飛び出した話は…。「いちばん衝撃的だったのは、向こうでは学生時代からデザインでけっこう食べていることでした。会社を持つていたり…。年齢もちょっと上で、必要なことがわかっていて勉強している、人間的に上な感じがしました。」

でも、授業は英語、その勉強は…。「幸い、私が行く前から、向こうから何度も学生が来ていて、コミュニケーションするために、ちょっとずつ覚ええました。思いを伝えられないときは、調べて表現を蓄積していきました。」

コミュニケーションに興味がある人だから、住む人、使う人を包み込むよ



渡邊さんの言葉は一つ一つに重みがあり、デザインの世界観とみごとに響きあう (j)

うなデザインができるのでしよう。

さて、そういう環境の中で初めて学んだ渡邊さんの家具には、一品物とは明らかに違うテイストがあります。スウェーデンならではの機能美か、仲間と培った社会性か？

「機能をモノのチャームポイントにする、それが機能美ですよね。工芸・民芸とデザインのちよつとした違いかもしれません。留学時代は、もつと角ばったデザインをしていました。」

人との幸運な巡り会いで起業
会社勤めはしたことがない

2004年6月に帰国した渡邊さんには素敵な出会いが待っていました。

「2005年、スウェーデン大使館で過去何年か分の交流成果の展覧会があり、その流れで、エルゴノミデザインジャパン株式会社(デザイン事務所)のダグ・クリングステット社長とともに、スウェーデンのライフスタイルについての講演をさせてもらいました。それを聞きに来た日本の会社と、デザイナーとして専属契約することになったのです。家具の要素を持った暖房器具のデザインを担当、一度も会社勤めすることなく起業しました。」

しかし渡邊さん、全国を飛び回る生



1

1.今も家族ぐるみの交流がある留学時代の仲間と日本で再会(2015年)/2.KAKULULU(店舗・家具デザイン):東京 東池袋の築45年余りのビルをリノベーションしたカフェ。チェアは定番(2015年)/3.さんろくまる(店舗・家具デザイン):山形市の和食店。ワインとのマリージュをコンセプトに出汁にこだわった料理を提供。2階のワイン&チーズショップも彼の仕事(2016年)(s)



2



3

おかみの依頼で上山温泉
名月荘の一室をリニューアル

さて、渡邊さん、大学の後援会会員企業からも仕事の依頼を受けています。「上山温泉の旅館 名月荘が今年の3月にリニューアルした一室は、おかみから依頼を受けた、『和』の仕事です。信頼する左官の手による黄土掻き落としの壁は圧巻ですが、見た目にはなかなか気持ちづらい部分にも工夫があります。睡眠の質を高めるために寝室の光源が直接目に入らないようにしたり、ガラスの掃除しやすさを考え、竹格子を脱着式にしたり。お客さんだけでなく、掃除婦さんにもやさしいデザインですね。いつもプロダクト目線です。」



名月荘の客室「柵」(くちなし)のリニューアル：山形が誇る上市市の名旅館の仕事。リビングと寝室に繋がりを持たせ、かつ朝食の準備の際には寝室のプライバシーを確保したいという要望を、透明な壁と半透明な建具で解決。半透明の建具がやわらかな光で空間を満たす、「和」の安らぎが心地よい。竹格子は取り外し可



使う人を思うこの姿勢は、渡邊さんの歩んだ人生を物語っているようです。「プロダクト目線ではあるけれど、工芸コースで自分の手で作った体験が大きかったです。どう作るかわからないと設計できないじゃないですか。工芸って昔のプロダクトデザインだと思っんです。当時の最高の手仕事でいいものを量産する。そこには勘所みたいなのがあって、押さえると背筋の通ったシンプルなもの、きちんと、早く、丁寧にできるんだと思います。道を究めた職人さんの仕事には、線一本無駄なものがない。素材がこういう形にしてくれと言うからこう作る。素材に無理をさせないですね。」

この部屋はコロナ禍を乗り越え、いつでもお客様をお迎えできます。

ウンノハウス
「土間のある家」にて

数日後、同じく後援会会員企業のウンノハウスの「土間のある家」を訪ねました。社内でコンセプトハウスの企画をしているのは、本学卒業生の加藤里紗さん(2002年 旧環境デザイン学科卒)です。全体のコンセプトは加藤さんが担当、渡邊さんは内装デザインの監修、ゾーニングなどを含めた全体のアドバイザーという立場で、かつ、家具のデザインを担当しました。「初めてのハウジングメーカーの仕事です。従来のウンノハウスではやったことがない挑戦をいっぱいさせてもらいました。」

と渡邊さん。こだわりの一棟を卒業生二人に案内してもらいました。

「土間は現代のガレージみたいなものだと考えています。家の中でも外でもできないことを、中間の土間でする。」

と渡邊さん。その土間に鎮座するのは、2019年にグッドデザイン賞と山形エクセレントデザイングランプリを獲得したベレットストーブ「OU」です。「OU」は山本製作所の製品です。県工業技術センターの紹介で依頼をい



「OU」はネーミングとロゴも渡邊さんの手による。職人たちとの絆から生まれた、まさに山形の逸品だ



土間で語り合う渡邊さんと加藤さん。これ1台で全館を暖房する「OU」は現代の土間によく似合う(j)

優しくて丁寧、人の心まで温めてくれるデザインです。

「素材の中でも金属に対するこだわりはめちゃくちゃあります。このダイニングテーブルも、脚の部分は19ミリ



「土間のある家」の見せ場はテレビ周りの壁面とキッチン奥の茶器棚のある壁面。どちらも手仕事の温かみを残しつつ、珪藻土で丁寧に仕上げられている。(外壁は表紙を参照) 定番のダイニングチェアは、この家のコンセプトカラーに合わせて、座面と背面をブラックに変更(n)

の鉄板からレーザーで抜き、エッジを手で面取りしました。鋳物のような塗装の質感にもこだわりました。」

この家には特別な見せ場が二つあるそうです。その部分の壁は、黄土色の

珪藻土で丁寧に塗られていました。

「二つはリビングのテレビ周りです。入り口から入って正面に位置する壁で、エアコンを隠すために壁をあえて一部前に出しました。テレビ台も宙に浮いた感じにしました。」

と加藤さん。そして、センターテーブルと「座るための場所」。地に足の着いたものを目指したそうです。

「テーブルは厚みの異なる板を積層させ地層をイメージ、透ける塗装を施しました。座る場所は椅子でもない、ソファでもない、座布団でもない。」

と渡邊さん。適度に硬くくつるげます。

もう一つのポイントとなる壁はキッチン背後。まるでドロイイングした一本の線のような茶器の棚は、6ミリ厚の鉄板を支えなしで壁から立ち上げ、宙に浮いているかのよう。加藤さんは「精神性をこめて『お茶を飲む空間』を作った」と言います。「線一本、無駄なものがない」という渡邊さんの言葉が具現化されていました。

加藤さんはこう振り返ります。「渡邊さんには、ウンノハウスの性能の良さを引き出し、人の心を掴んでもらいました。家具までデザインできる渡邊さんだからこそ、一棟をトータルなイメージでまとめられました。」

「セツナ」に込めた思いと
大学・後輩たちへのメッセージ

最後に、今後の抱負と、大学と後輩に対するメッセージをお聞きしました。「今、やりたいことができています。中長期的な目標はないですね。世界に通用する人になりたいと思います。『アトリエセツナ』のマークは砂時計のイメージです。『セツナ』とは時間の最小単位＝砂の一粒一粒です。点がつながり線となり、それがさらに面へ、立体へとつながっていく。目の前の一粒一粒を大切に積み重ねていけば、おのずからよい未来に到達できる。」

「大学で学生に教える機会をいただければうれしいです。卒業制作などで工場といっしょにもづくりしてみたい学生に、アドバイスできることがあると思います。学生時代から社会との接点を持つて学んでほしいです。」

大きなモノと小さなモノの間を行き来している渡邊さん。近い将来、まちづくりにも携わるようになるのでは...彼のつくったまちを見てみたいです。

blog.setsuna-design.net

